



書評 渡邊隆信著『ドイツ自由学校共同体の研究 : オーデンヴァルト校の日常生活史』

鈴木, 篤

(Citation)

研究論叢, 24:95-98

(Issue Date)

2018-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010523>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010523>



第三に、やや細かなことなのだが、諸法令の名称があまり正確に記されていないことが気になった。1903年の専門学校令や1918年の大学令の下位規程を「公立私立専門学校規定」「大学規定」と一貫して表記している。「文部大臣ノ主管ニ属スル法人ノ設立及監督ニ関スル規定」という記述もみられる。法令の名称をわざわざ「規定」で統一してしまったようにみえるのだが、いずれも「…規定」ではなく「…規程」というのが正しい。また、本書は大学認可の財的・人的・物的条件について「大学設立認可内規（秘）」が定めている、とたびたび触れているが、「大学設立認可内規（秘）」は1925年頃に成立したと中野実によって推定されており（中野実「旧制大学の設置認可の内規について—公文類聚からの紹介—」『大学史研究通信』第11号、1978年8月）、本書の分析期間（明治後期から大正期）の最末期にさしかかろうじて登場したに過ぎない。実際に用いられたものをあげるとすれば、文部省専門学務局が1919年に出した「発専七八号」通牒である（吉川卓治『公立大学の誕生』名古屋大学出版会、2010年、146～148ページ）。

（ミネルヴァ書房刊 2017年3月発行 本体価格6,000円＋税）

渡邊 隆信 著

『ドイツ自由学校共同体の研究－オーデンヴァルト校の日常生活史－』

鈴木 篤（大分大学）

本書は「ドイツ田園教育舎」のひとつとして知られてきた「オーデンヴァルト校」における教育実践や教師・生徒の関係を、公刊・未公刊の様々な史料を用いつつ創設者であるパウル・ゲヘーブ（Paul Geheeb）、他の教師たち、かつての生徒たちの発言・記述を中心としながら再構成するとともに、同実践を「ドイツ田園教育舎」としてではなく、「自由学校共同体」として新たに解釈しようとする意欲的研究である。

本書の構成は以下の通りである。

序章 研究の課題と方法

第Ⅰ部 自由学校共同体理念の形成と特質

第1章 ゲヘーブにおける自由学校共同体理念の形成

第2章 田園教育舎運動と自由学校共同体

第Ⅱ部 自由学校共同体における関係性の諸相

第3章 生徒－生徒関係の位相（1）－異年齢集団による共同生活－

第4章 生徒－生徒関係の位相（2）－男女共学の実践－

第5章 生徒－教師関係の位相－〈学校共同体〉と〈作業共同体〉－

第6章 教師－教師関係の位相－教職員組織の多層性－

第Ⅲ部 自由学校共同体を支える時間と空間

第7章 オーデンヴァルト校における時間創の創造

第8章 オーデンヴァルト校における学校空間の創造

終章 ナチス期における自由学校共同体の

変容

付 論 新教育の「大きな合流」を創る試み
-新教育連盟とヴェーニガー-

上述の通り、本研究の検討対象となる「オーデンヴァルト校」は日本において「ドイツ田園教育舎」のひとつとして知られてきた教育機関であり、その創設者ゲヘーブは「ドイツ田園教育舎」の創始者ヘルマン・リーツの協力者として有名な人物である。しかし、著者は議論を開始するにあたり、「『オーデンヴァルト校=田園教育舎』という図式をいったん括弧に入れ、自由学校共同体という観点からオーデンヴァルト校の理念と実践を改めて再構成する」(5頁)ことを本研究の課題として設定する。

その上でこうした課題の追究から導かれる意義として念頭に置かれるのは、以下の四点である。すなわち、第一に自由学校共同体という概念を中心とすることで、ゲヘーブの教育思想と実践、すなわちオーデンヴァルト校において取り組まれた様々な種類の実践を、全体として、有機的に結合したものとして把握することが可能となる点。第二に、自由学校共同体という概念に着目することで、リーツのドイツ田園教育舎やグスタフ・ヴィネケンのヴィッカーズドルフ自由学校共同体などの他の実践との共通点と相違点をより厳密に検討し、同時代の様々な実践の中にオーデンヴァルト校を位置づけることが可能となる点。第三に、共同体(ゲマインシャフト)という側面に光をあてることで、ドイツ新教育運動に通底した「学校のゲマインシャフト化」という動きの代表的事例としてオーデンヴァルト校を捉えなおすことが可能となる点。そして第四に、学校や学級を「共同体」として捉え、児童生徒・教職員の間の相互作用を学習指導や生徒指導に活かそうとする今日的な動きの中で、個を活かしつつ学校・学級づく

りに参画可能な児童生徒を育成するための実践例として自由学校共同体の可能性を示すことも可能となる点である。

これら四点の想定された意義から明らかのように、本研究はその対象となる読み手を通常の歴史研究よりも広く設定し、四種類の読者層を想定しているものと思われる。すなわち、第一はゲヘーブ個人の思想や実践に関心を持つ者であり、第二はより広く、「ドイツ田園教育舎」(著者の言葉を用いるならば「田園教育舎系の学校」)に関心を持つ者である。第三はさらに広く、(必ずしもドイツに限定されることのない)新教育運動全般に関心を持つ者であるが、第四は、さらに大きく対象を広げ、現代の日本の教育に関心を持つ者である。もっとも、これら四種類の読者層はその前提とする知識の種類や量においても関心の持ち方においても、当然ながら同一ではなく、それらを同時に対象とするのは容易なことではないだろう。

しかし、著者の論述は常にドイツ語の概念を一度日本語の概念を用いた思考のレベルへと戻した上で議論を進めるかたちをとるため、ドイツ教育史の専門家ならずとも容易に理解ができるよう配慮がなされている点は特筆すべきものである。(同時に、その議論はドイツ教育史の専門家の目から見ても議論が正確さを欠くことのない範囲内に収められている。)また、本研究においては、オーデンヴァルト校の具体的事例が論じられるに先立ち、ドイツにおける工業化の進展、男女共学化の普及、時間割の一般化、学校建築における流行などの歴史的過程が常に押さえられており、このことによって個別的事例が全体像の中にどのように位置づけるのかを読者が労せずして理解できるよう工夫されている。こうした試みによって、著者は上掲の四種類の読者層の期待に同時に応えることを目指すのである。

次に、本研究の内容を概観したい。第Ⅰ部ではまず、ゲヘーブが自由学校共同体の理念を形成した背景として、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてのドイツの社会状況や新教育運動の状況に目が向けられた後、ゲヘーブ自身の生い立ちや成長過程、自由学校共同体としてのオーデンヴァルト校の設立に至るまでの様々な人々との出会いや経験（ベルリンでのミンナ・カウアーとの出会いやモリッツ・フォン・エギディのサークルへの参加、リーツとの交流）が紹介され、ゲヘーブが追いつ求めた自由学校共同体という理念がヴィネケンの考えたものといかなる点で異なっていたのかが解明される（第1章）。さらに、当時のドイツにおいてオーデンヴァルト校のほかにも存在した「田園教育舎系の学校」がいかなるかたちでネットワークを構成し（「ドイツ自由学校連盟」の創設）、社会的認知を獲得したのか（中央教育研究所との共催によるベルリン大会）についても検討が行われる（第2章）。

次いで第Ⅱ部では、自由学校共同体の理念がオーデンヴァルト校の日常生活においてどのように具体化されていたのかが検討される。すなわち、異年齢集団の中で上級生と下級生という生徒－生徒関係が同権を前提としながらも能力上の差異という困難をはらんでいたこと（第3章）、そして、「ファミリー」という制度を核に男女共学を（当時のドイツにおいて最も徹底的なかたちで）目指しながらもその受け止め方は生徒一人ひとりによっても、社会の中の様々な集団によっても異なっていたこと（第4章）が指摘される。そして〈学校共同体〉や〈作業共同体〉の実施形態や討議内容が確認され、基本的には同権と共同責任を志向した生徒－教師関係が一定の課題も抱えていたことが明らかとなる（第5章）。なお、同校においては教師－教師関係においても同権が重視されていた。生徒に対

する教育にあたったのは教師だけではなく、教師以外の職員も同様であったが、これらの職員もまた〈教師会議〉に参加して教育上の決定に参画したのである（第6章）。

そして第Ⅲ部では、オーデンヴァルト校の時間と空間が、時間割と学校建築の観点から検討される。具体的には、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて時間割（授業時間と休憩時間）が厳密化されるようになるが、オーデンヴァルト校では「コース組織」制を導入することでこうした時間割を柔軟化し、生徒自身の選択に基づいた学習を可能としようとする試みが存在した（第7章）。そして、オーデンヴァルト校における各種施設の整備の過程において、生徒自身がその整備にも関与したことも指摘される（第8章）。

終章では、ナチス台頭の直前・直後の時期に光が当てられ、ゲヘーブのもとでのオーデンヴァルト校の最後が明らかにされる。この時期、オーデンヴァルト校では重要な制度のひとつであった「ファミリー」制（五～八名の生徒と教師が疑似家族を構成し同一の建物で生活する制度）が廃止され、生徒と教師とが別々に暮らすことを前提とする「世話係」制へと移行するが、その直後、ナチスの台頭によりゲヘーブはスイスに亡命し、残されたオーデンヴァルト校はその内実を大きく変化させることを余儀なくされた。

付論において焦点が当てられるのはエーリッヒ・ヴェーニガー（Erich Weniger）である。教育学者であったヴェーニガーはその人的ネットワークを活かして新教育連盟ドイツ支部の創設に携わるとともに、初代会長に就任すると、ドイツの新教育に関わる人々を結集させ、世界会議へと参加させようと尽力した。以上のように、本研究は様々な資料を用いながらゲヘーブを中心とした人々（教師・職員・生徒）の多様な思いや取り組みによって実現された自由学校共同体としてのオーデンヴァ

ルト校の様々な側面に目を向け、それぞれの側面を解明するものであった。こうした取り組みは冒頭で挙げた本研究の課題に対して見事に応えたものであり、同時に、想定された四種類の読者層における多様な知識の種類・量、関心の持ち方にも同時に応えるものであったといえよう。

なお、付論ではゲヘーブではなくヴェーニガーを中心に議論が行われた。「ドイツ新教育の国際的、国内的コミュニケーションの様態を検討するなかで、ゲヘーブの位置についても間接的に言及する」(10頁)ことが付論の意味であったが、この点については若干の踏み込みの弱さを感じられた。精緻な史料収集と分析に基づき、確認できたことのみを論じる著者の堅実な論述スタイルに鑑みれば当然かもしれないが、筆者なりの解釈や主張が、より強いかたちで表されていても良かったように思われる。もっとも、この点は評者による「ないものねだり」の感も強い部分であり、本研究の学術的価値を何ら損なうものではない。

(風間書房刊 2016年2月発行 本体価格
9,500円+税)